

長野遺跡群

県町遺跡（3）

—北野建設株式会社長野本社ビル解体工事及び

（仮）北野建設株式会社新長野本社ビル建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2021年3月

長野市教育委員会



調査区南半全景（南西から）



第2次面 弥生時代大溝（SD5・北東から）

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第157集として刊行いたします本書は、北野建設新社屋建設工事に伴って実施した、長野遺跡群に属する県町遺跡に関する調査報告書であります。

県町遺跡では、別地点において発掘調査が実施されており、弥生時代中期と古墳時代、平安時代の集落跡を検出したほか、墨書土器や稜鏡、蹄脚礎等が出土しています。

今回の発掘調査では、弥生時代中期と平安時代から近代の遺構を検出したほか、土師器や須恵器等が出土しました。そのほか、本遺跡の後町小学校跡地地点において平成28年に実施した発掘調査で検出した溝跡と同一遺構とみられる、弥生時代の大規模な溝跡を検出しました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力をいただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、長野県長野市南長野地区における「北野建設株式会社長野本社ビル解体工事及び(仮)北野建設株式会社新長野本社ビル建設工事」に伴い、記録保存を目的に実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査地は、長野県長野市大字南長野字聖徳601番1外に所在し、長野遺跡群県町遺跡内に位置している。
- 3 発掘調査の実施については、事業主体者である北野建設株式会社 代表取締役社長 北野貴裕 からの委託により、長野市長 加藤久雄 が受託し、長野市教育委員会が直営事業として実施した。なお、調査は長野市埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 埋蔵文化財の保護対象範囲は、開発事業面積2,989.37㎡の全域である。このうち、建物建設予定範囲の約650㎡を発掘調査実施対象範囲とし、調査を行った。なお、実質調査面積は638㎡である。
- 5 現地における発掘調査は、平成31年(2019)4月8日から令和元年(2019)5月31日まで行った。
- 6 現地における発掘調査は篠井ちひろと社本有弥が担当し、各調査員がこれを補佐した。本書の執筆・編集は飯島哲也の指導のもと篠井が担当した。
- 7 調査で得られた諸資料は、長野市教育委員会(長野市埋蔵文化財センター所管)で保管している。出土遺物の注記記号はアルファベットの「NAKH」である。
- 8 発掘調査の実施に際し、委託者である北野建設株式会社におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解を頂き、絶大なご協力を賜った。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は以下の通りである。

- 1 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（日本測地系2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所に委託した。
- 2 掲載した地図は上が真北を示す。また、実測図等に掲載した方位は全て座標北を表している。
- 3 掲載した遺構図、遺物実測図の縮尺は各図版に提示した。個別遺構図に関しては概ね1/40の縮尺で掲載しているが、微細図その他についてはこの限りではない。
- 4 掲載した遺構写真、遺物写真の縮尺は任意である。
- 5 遺構の略記号は以下の通りである。遺構番号は現場で付した通し番号を用いているが、整理調査時の検討によって欠番となったものや変更となったものについては、遺構一覧表において旧番号と欠番表記を併記した。
溝跡：SD 土坑：SK 井戸跡：SE 小穴：SP
- 6 遺構一覧表および遺物観察表の凡例は、それぞれの表掲載頁に記載した。
- 7 遺物実測図において、断面黒塗りは須恵器を表す。
- 8 土層の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」によるものである。

目次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 調査体制…………… 4

第3節 調査経過（調査日誌抄）…………… 5

第2章 調査地周辺の環境

第1節 遺跡の立地…………… 6

第2節 歴史的環境…………… 7

第3章 調査成果

第1節 試掘調査の概要…………… 10

第2節 発掘調査の概要…………… 10

第3節 第1次面の遺構と遺物…………… 15

第4節 第2次面の遺構と遺物…………… 18

第4章 総括…………… 22

報告書抄録

挿図目次

図1 調査地位置図（1/50,000）…………… 2

図2 調査地位置図（1/5,000）…………… 3

図3 開発区域と発掘調査対象範囲（1/2,500）… 3

図4 調査地周辺の地形（1/25,000）…………… 6

図5 調査地周辺の遺跡（1/20,000）…………… 9

図6 試掘調査位置図（1/2,000）…………… 10

図7 第1次面調査区全体図（1/200）…………… 11

図8 第2次面調査区全体図（1/200）…………… 12

図9 調査区西壁土層堆積状況図（1/100）…… 13

図10 個別遺構実測図1（SD1・SD2）…… 15

図11 個別遺構実測図2（SK3・11・16・18）… 16

図12 個別遺構実測図3（SE2）…………… 17

図13 個別遺構実測図4（SD5）…………… 19

図14 遺物実測図（SK18・SE2）…………… 21

図15 県町遺跡弥生時代中期大溝想定範囲… 23

表目次

表1 周辺遺跡一覧表…………… 8

表2 遺構一覧表…………… 14

表3 遺物観察表…………… 21

写真図版目次

遺物写真図版…………… 21

遺構写真図版1…………… 24

遺構写真図版2…………… 25

遺構写真図版3…………… 26

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

調査地の所在する南長野の県町地区は、長野県庁を始めとする官公庁や民間企業、ホテル等が林立する都市型のビジネスエリアであり、古くから人々の往来が激しい地区である。

この地区の一角に本社を構える北野建設株式会社の本社ビル建て替え工事について、長野市埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が把握したのは、平成30年7月20日のことである。4～5年前から本市開発部局とは協議を継続していたとのことであるが、埋蔵文化財保護の手続としては長野市建設部建築指導課から合議された同日付長野市長あての「開発行為計画協議書」が初見である。隣接する後町小学校跡地での調査経験から、文化財保護法（以下、法）第93条の手続きと試掘調査の必要性を回答した。その後計画の見直し等を経ながら、平成30年12月18日に試掘調査を行い、攪乱が著しいながらも良好な埋蔵文化財包含層の存在を確認した。平成31年2月27日付で法93条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」を受領し、同年3月7日30埋第2-296号にて発掘調査の保護措置を指示した。その後、綿密な保護協議を経て平成31年4月2日付で「埋蔵文化財の保護に関する協定書」を締結し、同月5日付で平成31年度分（令和元年度分）の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結した。

現地での発掘調査は、平成31年4月8日から令和元年5月31日までの54日間実施した。調査終了後、長野県教育委員会教育長あてに令和元年6月6日付元埋第69号にて「発掘調査終了報告書」を、委託者あてには同日付元埋第68号にて「発掘調査現場作業の終了及び引き渡しについて（通知）」を、長野中央警察署長あてには同日付元埋第70号にて「埋蔵文化財の発見について（通知）」を提出している。整理調査は令和2年度に実施し、令和3年3月本報告書を発刊し、全ての保護措置を終了した。



調査地周辺航空写真（▲の交点は調査地の位置を示す）

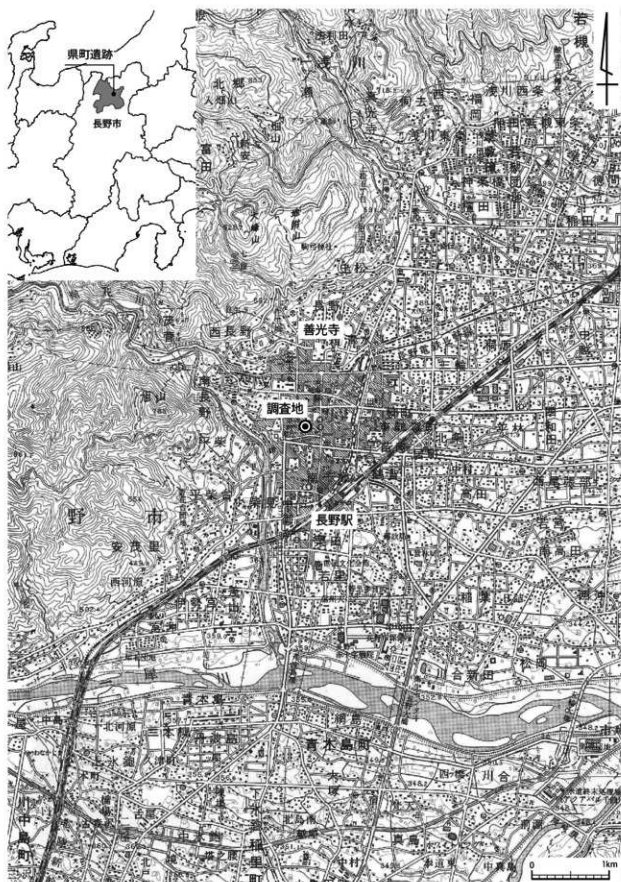


図1 調査地位置図 (1/50,000)

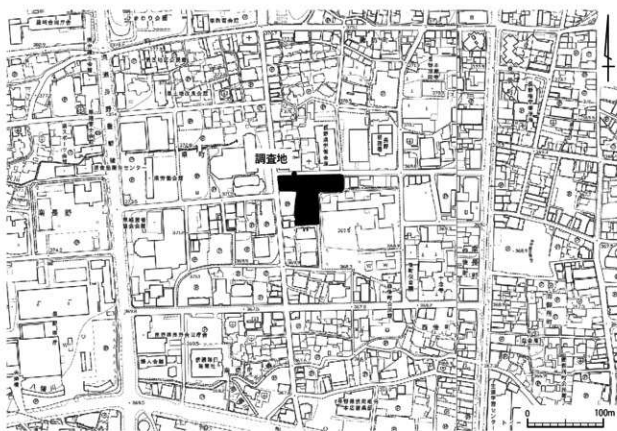


図2 調査地位置図 (1/5,000)

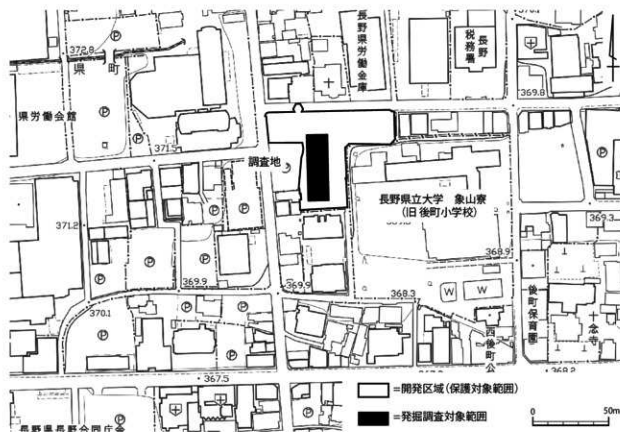


図3 開発区域と発掘調査対象範囲 (1/2,500)

第2節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	近藤 守
総括責任者	長野市教育委員会	教育次長	竹内裕治（令和元年度） 樋口圭一（令和2年度）
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課 長	小柳仁彦
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	局長兼所長	石田正路（令和元年度） 所 長 大井久幸（令和2年度）
調査担当者	長野市教育委員会文化財課（埋蔵文化財センター担当）	課長補佐	飯島哲也
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当 係 長		小林晴和
	事務職員		宮本博夫 宮崎千鶴子（令和元年度） 平林満美子（令和2年度）
	調査担当 係 長		風間栄一
	主 事		小林和子
	研 究 員		篠井ちひろ（主任調査員） 社本有弥（調査員・令和元年度） 田中暁穂 清水竜太 遠藤恵実子 小野涼香 井出靖夫（令和2年度） 伊藤愛（令和2年度）
発掘調査員	向山純子		
発掘補助員	後藤大地		
発掘作業員	青山三枝子 内田正征	江守久仁子 岡沢貴子 金子ボンティブ 中村泰明 峯村茂治	
	峯山真由美 宮尾弘子	宮本正守 向山久 山本光洋 渡辺由美	
整理調査員	青木善子 市川ちず子	鳥羽徳子 武藤信子	
整理作業員	飯島早苗 清水さゆり	西尾千枝 待井かおる 宮島恵子 三好明子	
測量業務委託	株式会社写真測図研究所		
重機等現物提供	北野建設株式会社		

第3節 調査経過（調査日誌抄）

- 4月8日（月） 調査区北半の重機による表土除去作業開始（～4月9日）。
作業員雇用開始。遺構検出開始。
- 4月10日（水） 降雨により作業休止。
- 4月11日（木） 調査区北半の写真撮影。
- 4月12日（金） 遺構測量。午後、今後の作業工程について北野建設株式会社と協議を行う。
- 4月15日（月） 遺構図結線。SE1解体作業。
- 4月16日（火） SE1の下層調査、詳細図作成。
北野建設株式会社のご厚意により、本社ビルの非常階段から全景写真撮影を行う。
調査区北半の調査終了。
- 4月17日（水） 土層確認用トレンチ掘削。
- 4月18日（木） トレンチ内土層精査。写真撮影。
- 4月22日（月） トレンチ遺構測量。
- 4月23日（火） 遺構図結線。
調査区北半引き渡し。
- 4月25日（木） 調査区南半第1次面の重機による表土除去作業開始（～4月26日）。
- 4月26日（金） 調査区壁面精査。
- 4月27日～5月6日 作業休止。
- 5月7日（火） 遺構検出開始。
- 5月8日（水） 遺構掘り下げ開始。
- 5月13日（月） 調査区写真撮影。
- 5月14日（火） 遺構測量。
- 5月15日（水） 遺構図結線。
- 5月16日（木） 調査区南半第2次面の重機による表土除去作業開始。
- 5月17日（金） 遺構検出開始。遺構の掘り下げ開始。
- 5月23日（木） SD5セクション図作成。
- 5月29日（水） 全体清掃、調査区写真撮影。
- 5月30日（木） 遺構測量。
- 5月31日（金） 遺構図結線。器材搬出。現場における発掘作業終了。



重機表土剥ぎ



発掘作業風景



測量風景



発掘作業員集合写真

第2章 調査地周辺の環境

第1節 遺跡の立地

県町遺跡は長野市の北西部に位置する。長野盆地の西縁に接する西部山地に近く、調査地からは旭山や大峰山を望むことができる。調査地が所在する長野市大字南長野を含む一帯は、裾花川が形成した河岸段丘と湯福川扇状地との複合地形である。旭山里島地籍付近から盆地内に流入する裾花川は、同地籍を扇頂とする裾花川扇状地を形成している。東から南の方向に向かって長野市街地をのせ、扇端は南東側で犀川扇状地に、東側で千曲川氾濫原に接する。扇状地の勾配は長野市中心市街地で10/1,000程度と、緩やかな傾斜となっている。扇頂には裾花川に沿って数段の河岸段丘が形成されている。なお、現在の裾花川は長野県庁西側から直線的に南下して犀川に合流しているが、これは近世初頭に松代藩が行った瀬替えによるものである。それ以前は南東方向へ流下しており、北八幡川、南八幡川、古川、計退川等の裾花川旧流路にその痕跡を見ることができる。

一方、善光寺の北西にある湯福神社を扇頂とする湯福川扇状地は、平均勾配50/1,000という急傾斜扇状地である。裾花川河岸段丘を覆って市街地北部を占め、長野市権堂町から三輪田町付近まで張り出している。このため、裾花川河岸段丘の第2段以下は西長野・南長野地籍以東の追跡が困難となっている。

調査地は県労働会館や妻科神社と同じ段丘上に立地する。この段丘は、調査地の東にある中央通り付近まで追跡できるが、これより東は前述の湯福川扇状地による被覆のため確認できない。水はけの良い地質と日当たりが良い立地条件から、原始古代より居住域として利用され、明治期以降には急速に市街地開発が行われた地域である。

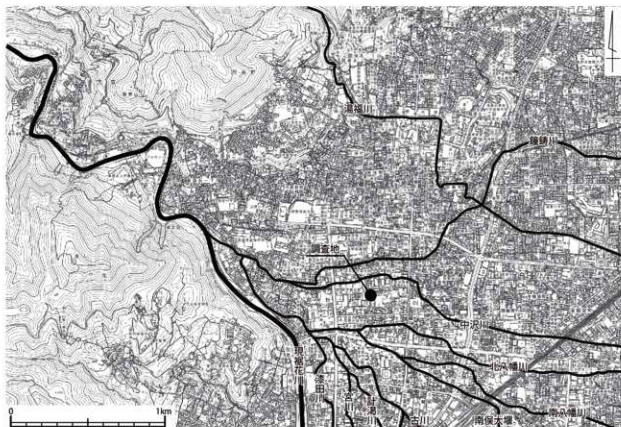


図4 調査地周辺の地形（1/25,000）

第2節 歴史的環境

県町遺跡が属する「長野遺跡群」は、長野地区における裾花川河岸段丘および湯福川扇状地上に展開する諸遺跡を包括した遺跡群である。各開発事業に伴い、複数遺跡において発掘調査が実施されてきた。本節では長野遺跡群の時代ごとの概要と、県町遺跡の既往調査に関して記述する。なお、長野遺跡群内の諸遺跡と近隣の遺跡に関して表1および図5にまとめた。

縄文時代 長野遺跡群において最初に集落が認められるのは、縄文時代中期である。旭町遺跡(5)では中期の竪穴住居跡2軒と埋裏が検出された。出土遺物の中には東北地方や関東地方の土器、タカラガイ形土製品があり、当時の人々が広範囲の交易を行っていたと考えられる。西町遺跡(6)でも同じく中期の竪穴住居跡1軒が検出された。

弥生時代 弥生時代では中期から生活の痕跡が見られる。新諏訪町遺跡(長野西高校調査地点・11)で検出された配石遺構からは中期初頭の土器群が出土した。この土器群は、調査者である笹澤浩氏によって新諏訪町式土器として型式設定されている。中期後半の栗林式期は、遺跡群内の複数地点で集落跡を検出している。県町遺跡(マンション建設地点・3、後町小学校跡地地点・4)、西町遺跡、東町遺跡(7)、後町遺跡(10)で該期の集落跡が検出された。このうち、近接する県町遺跡の後町小学校跡地地点と後町遺跡は立地的にも一連の集落跡である可能性が指摘されている。また、東町遺跡からは竪穴住居跡より「戈を持つ鳥装の人物」を描いた栗林式土器の壺が出土し、西日本から伝播した農耕祭祀が当地でも行われていたことを示す資料として注目される。弥生時代後期の集落は、新諏訪町遺跡(旭塚地点・12)と箱清水遺跡(13)で見つかっている。箱清水遺跡は、千曲川流域を中心に分布する箱清水式土器の標式遺跡である。明治34年の長野高等女学校(現長野西高校)敷地造成工事の際に発見・報告がされた。遺跡範囲は造成地の南半分にあたる校舎棟から前庭にかけてと推定される。新諏訪町遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭の集落跡を検出した。なお、箱清水遺跡でも時期の詳細は不明だが古墳時代の竪穴住居跡の存在が指摘されており、弥生時代後期から古墳時代の集落の存在が窺われる。

古墳時代 古墳時代の集落は、西町遺跡、東町遺跡、県町遺跡(国際会館地点・2)で見つかっている。古墳時代前期から後期の遺構が検出されているが、古墳時代後期に遺構数が増加する傾向にあり、集落規模が拡大したと考えられる。また、西町遺跡では、前期から後期にかけて継続性のない単一集落が検出された。その他、元善町遺跡(8)や善光寺門前町跡(9)でも古墳時代の遺構が若干ではあるが検出された。

長野遺跡群の周辺をみると、遺跡群の南にある御所遺跡(29)、南西の安茂里遺跡群にある差出遺跡(16)や平楽平遺跡(17)にも古墳時代の集落跡が認められる。また、裾花川右岸の安茂里地区には、木曾屋敷古墳(18・19)、遠藤塚古墳(20)、中塚古墳(21)、きょう塚古墳(22)等の中後期古墳が点在している。

奈良時代・平安時代 県町遺跡、東町遺跡、西町遺跡で集落が見つかっている。県町遺跡国際会館地点と後町小学校跡地地点では竪穴住居跡のほか、複数の掘立柱建物跡が検出された。国際会館地点では掘立柱建物跡の柱穴内から蹄脚礎の破片が出土したことから、水内都衙跡と推定されている。マンション建設地点、後町小学校跡地地点においても、須臾器双耳杯、円面碗、稜椀等が出土した。蹄脚礎を含めたこれらの遺物は、官衙やその周辺集落から出土する例が多く、県町遺跡が立地する段丘上に都衙とそれを取り巻く集落が形成されていた可能性が高い。東町遺跡については、整理調査が未完了のため詳細は不明である。西町遺跡では竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟が検出された。また、元善町遺跡での発掘調査では、調査を実施した2地点から合わせて2,200点を超える多量の古代瓦が出土した。

中世 善光寺参道沿いには門前町が発展し、西町遺跡、元善町遺跡、善光寺門前町跡、後町遺跡等から、当時の

善光寺門前の様相を窺うことができる。西町遺跡と善光寺門前町跡の調査では、カワラケや内耳鍋、古瀬戸、珠洲焼等の陶器、瓦質土器、輸入陶磁器が出土した。また、渡来銭が多数出土しており、門前町の賑わいを示す資料となった。遺構では、両遺跡で一連の遺構と考えられる大溝が検出されており、注目される。また、善光寺周辺の丘陵や山頂には、南北朝～戦国時代に山城が築造された。

【県町遺跡 既往調査概要】

県町遺跡 国際会館地点 昭和42、53年に調査を実施した。両調査で検出した遺構は竪穴住居跡27軒（古墳時代中～後期7、同後期8、奈良時代1、平安時代8）、掘立柱建物跡1棟（奈良時代）、火葬墓1基（平安時代）等である。掘立柱建物跡の柱穴内から蹄脚礎が出土し、水内郡衙推定地となっている。

県町遺跡 マンション建設地点 平成27年に調査を実施した。竪穴住居跡20軒（弥生時代中期後半2、奈良～平安時代18）、土坑2基、溝跡3条等を検出した。弥生時代中期の住居跡からは、住居の北西隅から壺と甕が計10個体まとまって出土した。奈良～平安時代の竪穴住居跡からは、円面礎の脚部と須恵器双耳杯破片が出土した。

県町遺跡 後町小学校跡地点 平成27、28年に調査を実施した。竪穴住居跡20軒（弥生時代中期後半5、同後期1、古墳時代後期1、奈良～平安時代13）、掘立柱建物跡4棟（奈良～平安時代）、溝跡、土坑等を検出した。弥生時代中期の溝跡は幅4.6～5.1m、深さ1～1.2mの大溝で、集落を囲郭する溝と考えられる。遺物では大型の瓢形壺や、小型壺に納められたアワの種子などが出土した。奈良～平安時代の出土遺物には椀や「厨」の文字が書かれた墨書土器がある。また、片廂建物跡が1棟検出されるなど、他2地点の調査成果と合わせて官衙の存在を補強する成果が得られた。

表1 周辺遺跡一覧表（●は検出遺構の時期を示す）

番号	遺跡名(地点名)	種別	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
1	調査地	集落跡		●		●			
2	県町遺跡(国際会館地点)	集落跡		●	●	●			
3	県町遺跡 (マンション建設地点)	集落跡		●		●			
4	県町遺跡 (後町小学校跡地点)	集落跡		●	●	●			
5	旭町遺跡	集落跡	●	●					
6	西町遺跡	集落跡	●	●	●	●	●		
7	東町遺跡	集落跡	●	●	●	●	●		
8	元善町遺跡	集落跡		●			●	●	
9	善光寺門前町跡	集落跡		●			●	●	
10	後町遺跡	集落跡		●			●	●	
11	新瀧町遺跡 (長野西高校調査地点)	集落跡		●	●				
12	新瀧町遺跡(旭寮地点)	集落跡		●	●				
13	箱清水遺跡	集落跡		●					
14	西長野古墳群	古墳		●					
15	横山城跡	城館跡					●		
16	差出遺跡	集落跡		●	●	●			
17	平楽平遺跡	集落跡	●	●	●				
18	木曾屋敷古墳1号墳	古墳			●				
19	木曾屋敷古墳2号墳	古墳			●				
20	遠藤塚古墳	古墳			●				
21	中塚古墳	古墳			●				
22	きょう塚古墳	古墳			●				
23	北原古墳群	古墳			●				
24	弥勒寺古墳	古墳			●				
25	新聞古墳1号墳	古墳			●				
26	新聞古墳2号墳	古墳			●				
27	大黒山城跡	城館跡						●	
28	小柴見城跡	城館跡						●	
29	御所遺跡	集落跡		●	●	●	●		
30	西香場遺跡	集落跡				●	●		
31	中御所居館跡	城館跡					●		
32	葛山城跡	城館跡					●		
33	新朝山城跡	城館跡					●		
34	旭山城跡	城館跡					●		
35	玉塚古墳	古墳			●				
36	岩下古墳	古墳			●				
37	双子塚古墳	古墳			●				
38	大黒山古墳	古墳			●				

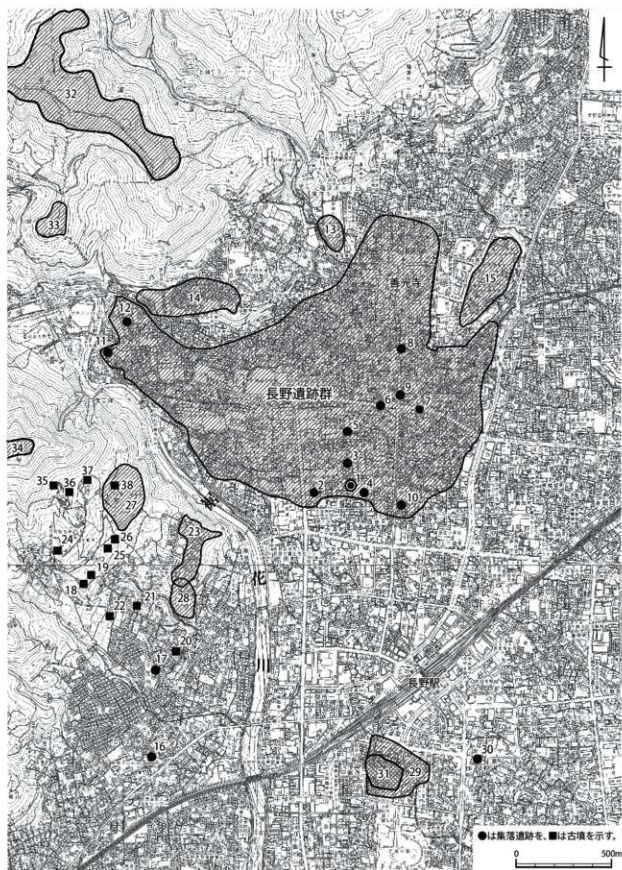


図5 調査地周辺の遺跡 (1/20,000)

第3章 調査成果

第1節 試掘調査の概要

事業予定地における試掘調査は、平成30年12月18日に実施した。調査は事業予定地内の任意の地点に試掘坑を掘削し、坑内断面の土層観察により遺物包含層の有無および深度を確認するものである。試掘坑は5箇所に設定した（1トレンチ～5トレンチ）。

試掘調査の結果、3トレンチ～5トレンチにおいて炭化物や遺物を含む暗褐色～灰褐色土層が検出され、遺物包含層と判断した。また、3トレンチでは遺物包含層と判断した暗褐色土層の約40cm下から、炭化物および土器片を含む暗黄褐色砂質土の堆積が確認された。以上より、事業予定地では埋蔵文化財の包蔵が認められ、予定地東側に隣接する県町遺跡後町小学校跡地地点と同一の集落が展開する可能性が極めて高いとの結論を得た。

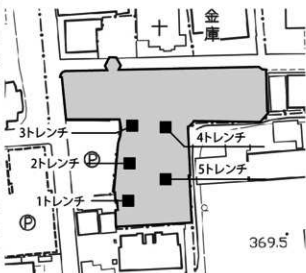


図6 試掘調査位置図 (1/2,000)

第2節 発掘調査の概要

発掘調査は建物建設範囲と解体クレーン設置範囲を合わせた約650㎡を対象として実施した。実質調査面積は638㎡である。残土仮置きスペースを確保するため、調査区を南北に分割して調査を行った。また、調査区西側において南北方向のトレンチ（Tr1）を設定し、調査区全体の土層堆積状況および旧地形について観察を行った（図7・9）。

調査区における基本層序は、上層から表土層（第1層）、盛土層（第2層）、褐色粘質土層（第3層）、黄褐色粘質土層（第4層）、黒褐色粘質土層（第5層）、灰色ブロック混じり褐色粘質土層（第6層）、褐色粘質土層（第7層）、灰褐色砂質土層（第13層）である。含有物より、第5層および第7層を遺物包含層と判断し、第5層底面にあたる地表下約60cmを第1次検出面、第7層底面にあたる地表下100cmを第2次検出面に設定した。

本調査地では大きな地形変化は見られないが、調査区の南北両端から中央部に向かって、第3層から第7層が緩やかに降下する様相が認められた。最低部となる調査区中央周辺では砂質土の堆積が認められることから、調査区中央部に東西方向のトレンチ（Tr2）を設定し、土層観察を行った。Tr2では第7層以下で砂質土や粗砂層が堆積している状況であった。このことから、旧地形はTr2周辺が低地となっており、河川や湿地等が存在したと考えられる。

発掘調査で検出した遺構は、調査区全体で溝跡6条、土坑19基、小穴17基、井戸跡2基である。竪穴住居跡および掘立柱建物跡は検出されなかった。出土遺物から、第1次面で検出した遺構の時期は平安時代以降、第2次面で検出した遺構の時期は弥生時代中期以降と判断する。なお、第2次面では調査区の南半のみを全面発掘とした。これは、調査区中央部から同北半の一部に河川や湿地の存在が想定されることから、調査区北半において遺構の存在は極めて希薄であると判断したためである。

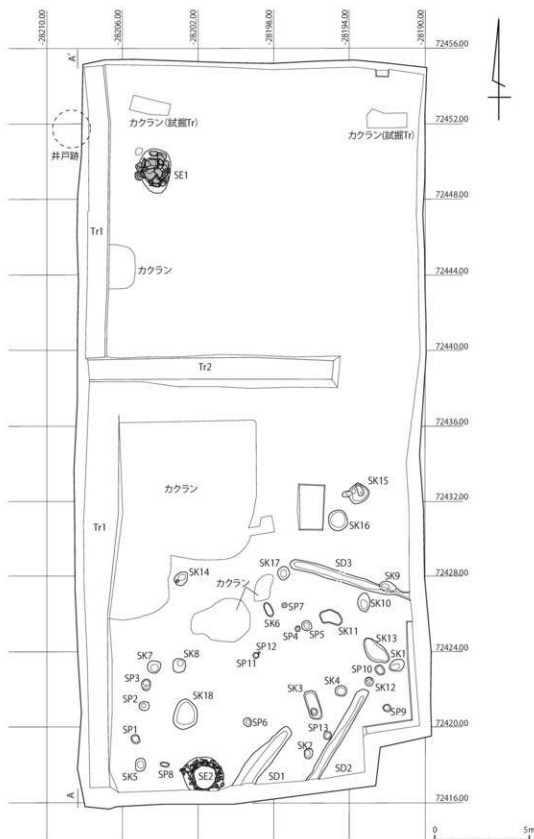


図7 第1次面調査区全体図 (1/200)

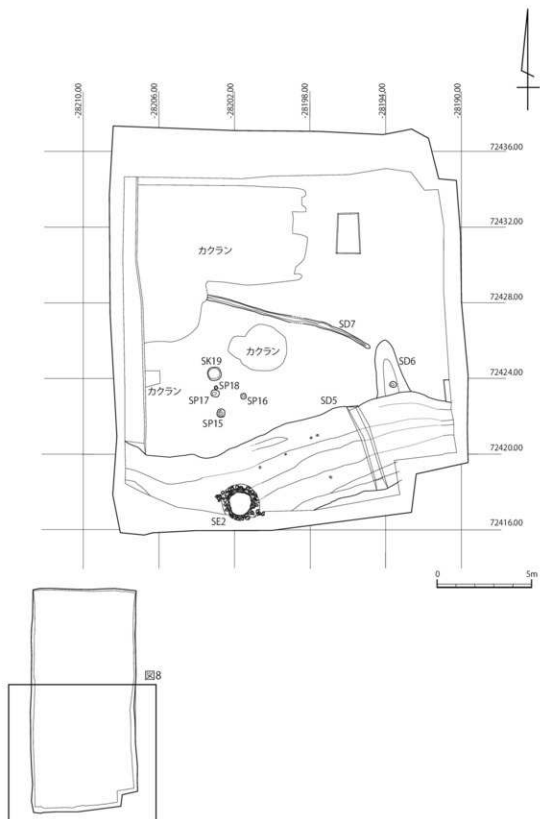


図8 第2次面調査区全体図 (1/200)

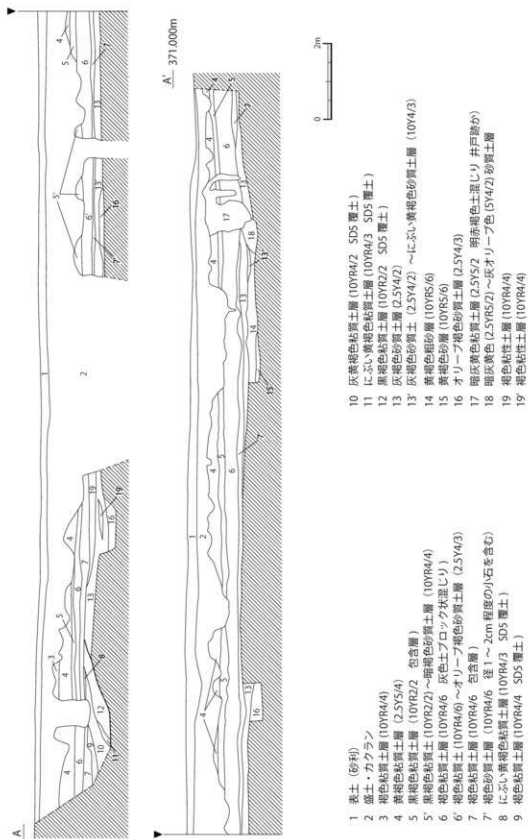


図9 調査区西壁土層堆積状況図 (1/100)

表2 遺構一覧表

※法量の()内数値は、残存値を示す。

遺構名	記号	面	遺構			出土土器			その他出土遺物	時期
			形態	規模 (m)	深さ (m)	報告点数	破片(g)	総量(g)		
1号溝跡	SD1	1	-	長 3.80 幅 1.06	0.20	0	0	0		不明
2号溝跡	SD2	1	-	長 5.46 幅 0.58	0.16	0	36	36		平安時代
3号溝跡	SD3	1	-	長 6.54 幅 0.54	0.14	0	0	0		不明
4号溝跡	欠番	-	-	-	-	-	-	-		-
5号溝跡	SD5	2	-	長 17.6 幅 4.7	1.20	0	39.1	39.1	骨片	弥生時代中期
6号溝跡	SD6	2	-	長 2.94 幅 1.62	0.20	0	35.3	35.3		弥生時代?
7号溝跡	SD7	2	-	長 9.0 幅 0.34	0.27~	0	0	0		不明
1号土坑	SK1	1	楕円形	0.84×0.60	0.16	0	13.5	13.5		平安時代
2号土坑	SK2	1	楕円形	0.54×0.44	0.11	0	3.1	3.1		不明
3号土坑	SK3	1	隅丸長方形	1.56×0.66	0.30	0	152.5	152.5		平安時代
4号土坑	SK4	1	円形	0.60×0.58	0.25	0	11	11		平安時代
5号土坑	SK5	1	楕円形	0.68×0.52	0.04	0	0	0		不明
6号土坑	SK6	1	楕円形	0.80×0.38	0.08	0	0	0		不明
7号土坑	SK7	1	円形	0.68×0.68	0.17	0	0	0		不明
8号土坑	SK8	1	円形	0.76×0.72	0.27	0	34.8	34.8		平安時代
9号土坑	SK9	1	楕円形	(0.9)×(0.54)	0.18	0	4.3	4.3		不明
10号土坑	SK10	1	楕円形	1.00×0.66	0.20	0	47.8	47.8		平安時代
11号土坑	SK11	1	不整形	1.24×0.68	0.10	0	31.6	31.6		平安時代
12号土坑	SK12	1	円形	0.50×0.46	0.15	0	58.5	58.5		平安時代
13号土坑	SK13	1	楕円形	1.70×0.94	0.08	0	0	0		不明
14号土坑	SK14	1	楕円形	0.80×0.62	0.13	0	30	30		不明
15号土坑	SK15	1	不整形	1.44×1.16	0.43	0	0	0		不明
16号土坑	SK16	1	円形	1.10×1.00	(0.60)	0	43	43		不明
17号土坑	SK17	1	円形	0.70×0.64	0.10	0	0	0		不明
18号土坑	SK18	1	楕円形	1.60×1.22	0.14	5	528.8	901.3		平安時代
19号土坑	SK19	2	円形	0.72×0.70	0.13	0	0	0		不明
1号井戸跡	SE1	1	円形?	2.34×1.69	-	0	0	0		近現代
2号井戸跡	SE2	1	円形	内径1.14	(1.00)	1	176.1	230.3	不明鉄製品	近現代
1号小穴	SP1	1	円形	0.50×0.46	0.06	0	0	0		不明
2号小穴	SP2	1	円形	0.54×0.46	0.16	0	0	0		不明
3号小穴	SP3	1	楕円形	0.62×0.48	0.23	0	10.7	10.7		不明
4号小穴	SP4	1	円形	0.30×0.30	0.16	0	0	0		不明
5号小穴	SP5	1	円形	0.52×0.54	0.18	0	0	0		不明
6号小穴	SP6	1	円形	0.46×0.42	0.21	0	0	0		不明
7号小穴	SP7	1	円形	0.26×0.26	0.09	0	0	0		不明
8号小穴	SP8	1	楕円形	0.50×0.24	0.23	0	7.1	7.1		不明
9号小穴	SP9	1	円形	0.40×0.40	0.29	0	0	0		不明
10号小穴	SP10	1	楕円形	0.56×0.46	0.17	0	0	0		不明
11号小穴	SP11	1	円形	0.30×0.30	0.10	0	0	0		不明
12号小穴	SP12	1	円形	0.11×0.11	0.10	0	0	0		不明
13号小穴	SP13	1	円形	0.44×0.42	0.11	0	0	0		不明
14号小穴	欠番	-	-	-	-	-	-	-		-
15号小穴	SP15	2	円形	0.46×0.46	0.16	0	0	0		不明
16号小穴	SP16	2	円形	0.30×0.30	0.17	0	0	0		不明
17号小穴	SP17	2	円形	0.44×0.44	0.23	0	0	0		不明
18号小穴	SP18	2	円形	0.20×0.20	0.05	0	0	0		不明
Tr1						0	167.7	167.7		
検出面						0	1012.8	1012.8	骨片・不明鉄製品	
包含層						0	216.2	216.2	不明鉄製品	
覆乱・調査区外						0	497.1	497.1		
総計						6	3157	3583.7		

第3節 第1次面の遺構と遺物

第1次面で検出した遺構は、溝跡3条、土坑18基、小穴13基、井戸跡2基である。遺構は調査区南側に集中しており、同北側では井戸跡1基を検出したのみである。主体となる遺構は土坑および小穴で、竪穴住居跡は検出してない。また、掘立柱建物跡と判断し得る柱穴列も検出できなかった。遺物が出土しない遺構が多く、時期を特定できた遺構は少ない。本節では、検出した遺構のうち主要なものに関して記述する。

【溝跡】

SD1 調査区南端中央で検出した。北東から南西方向に伸びる溝で、南西部は調査区外となる。検出範囲における規模は長さ3.8m、最大幅1.06m、深さ約0.2mである。遺構断面形は逆台形を呈し、底面がやや平坦である。遺物は出土していない。遺構の時期は明確ではないが、平安時代以降の掘削と考えられる。

SD2 調査区南端中央で検出した。SD1と同様、北東から南西方向に伸びる溝である。南西部は調査区外となる。検出範囲における規模は長さ5.46m、最大幅0.58m、深さ約0.16mである。遺構断面形はU字状を呈す。遺物は、土器36gが出土した。全て小破片である。遺構の時期は平安時代以降と考えられる。

SD3 調査区東側で検出した。北西から南東方向へ伸びる溝で、南東部は調査区外となる。検出範囲における規模は長さ6.54m、最大幅0.54m、深さ約0.14mである。SK9と重複するが、新旧関係は不明である。遺構断面形はU字状に近い形状を呈すが、不整形となる部分も多く、人為的な掘削ではない可能性がある。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

【土坑】

SK3 調査区南側中央付近で検出した。北西-南東方向に長軸をとる長方形を呈す。遺構の規模は長軸1.56m、短軸0.66m、深さ約0.3mである。土坑底部の南西寄りにピットを検出した。出土遺物は土器152.5gである。

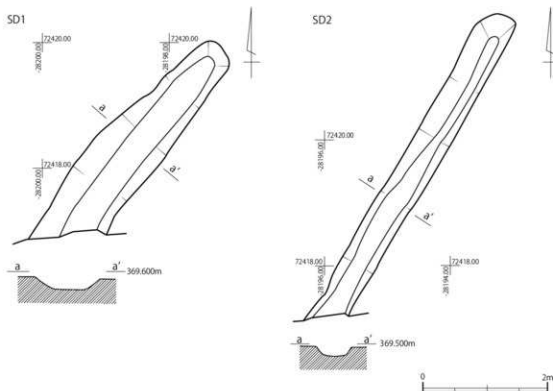


図10 個別遺構実測図1 (SD1・SD2 1/60)

全て細片で図化できるものはない。黒色土器、土師器、須恵器が出土しており、量は須恵器が最も多い。器種を特定できる破片は少ないが、須恵器は杯の口縁部と底部の一部、杯蓋等が認められる。SK3は平面形と長軸の方向から土坑墓の可能性はあるが、遺構内からは骨片や副葬品等の埋葬を示す遺物は出土していない。遺構の時期は平安時代以降と判断される。

SK11 調査区南東側で検出した。平面形は不整形を呈す。遺構の規模は、長軸1.24m、短軸0.68mで、深さは約0.1mと浅い。遺構覆土には炭化物和焼土ブロックが含まれていたが、内部に被熱痕は無く、遺構内で燃焼行為があった可能性は低い。出土遺物は土器31.6gである。全て細片で図化できるものはない。土師器と須恵器が出土しており、須恵器の杯口縁部が認められる。遺構の時期は平安時代以降と判断される。

SK16 調査区東側中央付近で検出した。平面形は径約1.1mの円形を呈す。深さ約60cmまで掘り下げたが、地

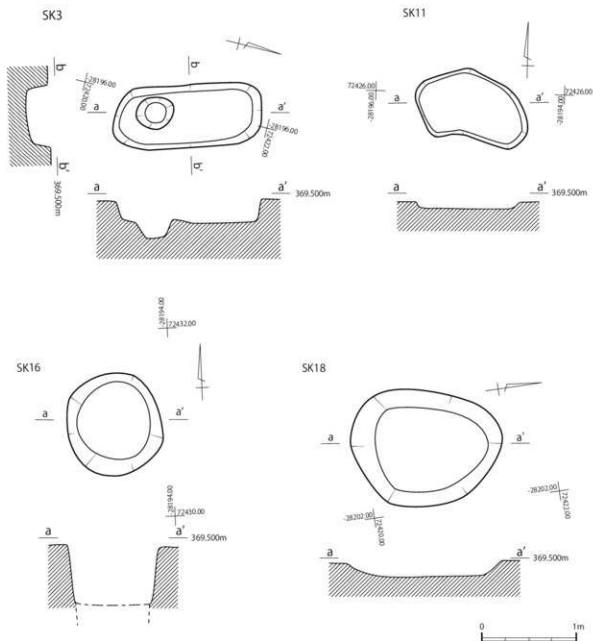


図11 個別遺構実測図2 (SK3・11・16・18 1/40)

山層が砂質土となったため、安全面からこれ以下の掘削を中止した。出土遺物は土器43gである。須恵器および土師器が認められるが、いずれも細片で図化できるものはない。遺構の時期は平安時代以降と考えられる。また、遺構の様相から素掘りの井戸跡の可能性がある。

SK18 調査区南西で検出した。平面形は楕円形である。遺構の規模は、長軸1.6m、短軸1.22m、深さ約0.14mである。遺構覆土は円礫混じりの暗褐色粘土で、SK18周辺で検出した他の遺構と土質を異にする。当初、井戸跡と推測していたが、覆土を掘り下げたところ浅い土坑であることが判明した。出土遺物は土器901.3gである。大半が細片だが、残存状態が比較的良好な須恵器の杯蓋（1～3）、播鉢破片（4）、乗燭（5）を図化した。1は扁平形の握みを持つ杯蓋である。外面にはケズリ調整が認められる。2と3は宝珠形の握みを持つ杯蓋である。2は口縁端部が欠損しているため正確な法量は不明だが、残存部分から口径は13cm前後と推測される。外面全体の約1/2をケズリ調整する。3は口径17.8cmを測る大型の杯蓋である。外面のケズリ調整は全体の1/3程度で、端部に自然軸の付着が認められる。4は在地産須恵器の播鉢である。5は江戸末期から明治期の瀬戸・美濃系陶器の乗燭である。中央円筒状の突起は、末広がりに広がる形状で、底面以外に青緑色から褐色の釉薬を施す。4、5ともに混入品と考えられる。SK18の出土遺物は須恵器を主体とし、若干の土師器が含まれる。器種や器形を特定できる資料が限られているが、遺物の様相から遺構の時期は平安時代初頭から前半頃と判断する。

【井戸跡】

SE1 調査区北側で検出した。長軸2.34m、短軸1.69mの楕円形に近い形状を呈する。遺構内部には40cm前後から1mを超える大型の角礫や川原石が埋められている状態であった。掘り込みの内部からスレートやタイル等の現代遺物が複数見つかり、近年に埋められたものである。遺構内部の石を除去しきれなかったため、遺構の深さは不明である。石組や木枠等は検出されなかった。遺物は出土しておらず、掘削された時期は不明である。

SE2 調査区南端中央付近で検出した。石組の井戸跡である。後述のSD5と重複する。遺構南西端部が調査区外となる。井戸の内径は1.14mで、縦40cm×横25cm程度の石材を積み上げて構築されている。遺構上面から約1mの深さまで掘り下げを行ったが、底部の検出には至らなかった。既存駐車場造成の際に埋め立てが行われたとのことである。

出土遺物は土器および陶磁器230.3gである。土器は須恵器杯（6）のほかは破片資料である。黒色土器、土師器、須恵器が認められ、時期は平安時代以降と推定される。陶磁器は小破片が2点のみで、時期は近世以降と考えられる。SE2の出土遺物はいずれも埋土の上層からの出土であり、遺構の構築時期は判断し難い。

このほか、Tr1の土層観察でSE1、2とは別の井戸跡とみられる掘り込みを確認した（図9）。調査区

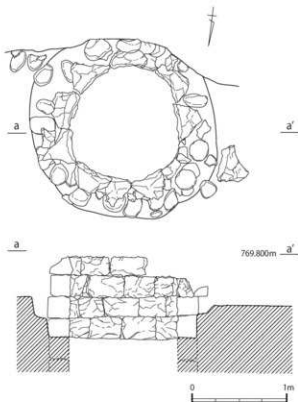


図12 個別遺構実測図3（SE2 1/40）

内において平面プランが検出されなかったことから、遺構の大部分は調査区外にあると判断する（図7）。

第4節 第2次面の遺構と遺物

第2次面で検出した遺構は、溝跡3条と土坑1基、小穴4基である。第1次面と同様、竪穴住居跡や掘立柱建物跡は検出されなかった。

【溝跡】

SD5 調査区南端で検出した。調査区を東西に横断する溝で、両端部は調査区外となる。検出範囲における遺構の規模は長さ約17.6m、最大幅4.7m、深さ1.2mである。遺構断面形は緩やかなV字状を呈し、部分的に中段が認められる。溝内部からはP1～P5の小穴が検出された。

出土遺物は土器39.1gである。全て細片で図化できるものはない。大半が土師器で、割れ口や器面が摩耗したものが多く。遺構の規模や断面形、覆土の様相から、SD5は県町遺跡後町小学校跡地地点で検出された大溝（DSD4）と同一遺構であると考えられる。

SD6 調査区東側で検出した。SD5と重複する。長さ2.94m、最大幅1.62m、深さ約0.2mである。SD5に向かってやや深くなる傾斜が認められ、SD5に接続する。

出土遺物は土器35.3gである。全て細片で図化できるものはない。SD5と概ね同時期の遺構と判断する。

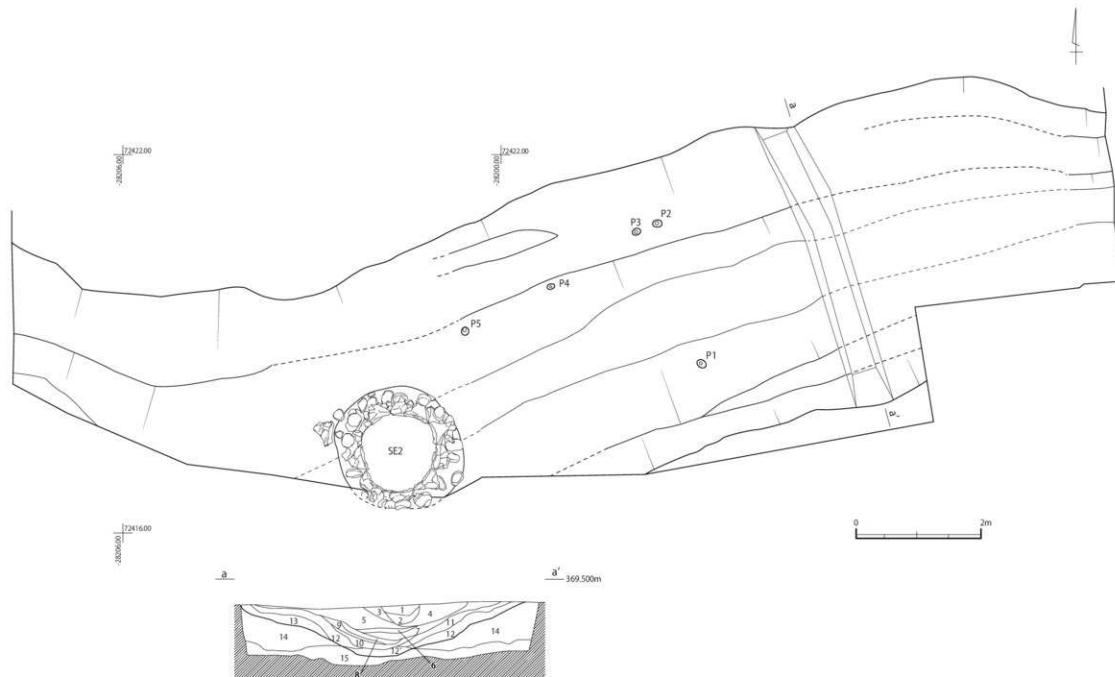
SD7 調査区中央西側で検出した。北西から南東に向かって延びる溝で、北西端部は攪乱によって破壊されている。検出範囲における遺構の規模は、長さ9m、最大幅0.34mである。遺物は出土していない。また、遺構底部は凹凸が激しく、浅深が定まらない。このため、水流等によって自然形成されたものである可能性が高い。

【土坑・小穴】

土坑および小穴は、調査区の西側に集中する。いずれも深さが10～20cm前後で、遺物も出土しなかった。弥生時代の遺構である可能性が高いが、時期の詳細は不明である。

引用・参考文献

- 上水内郡誌編集会 1976『長野県上水内郡誌』歴史編
寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」99シンポジウム長野県の弥生土器編年」長野県考古学会
島羽英樹 2000 「善光寺平南縁の古墳時代前期～古代の上器編年（3世紀後半～11世紀後半）」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28
更埴市内その7 更埴糸里遺跡・屋代遺跡群（含む大鏡遺跡・窪河原遺跡）－総集編－』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54
長野県 1982 『長野県史』考古資料編主要遺跡（北・東信）
長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌』第1巻 自然編
長野市誌編さん委員会 2000 『長野市誌』第2巻 歴史編 原始・古代・中世
長野市教育委員会 1994 『長野遺跡群 西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第87集
長野市教育委員会 2006 『長野遺跡群 善光寺門前町跡』長野市の埋蔵文化財第115集
長野市教育委員会 2008 『長野遺跡群 元善町遺跡・善光寺門前町跡（2）』長野市の埋蔵文化財第121集
長野市教育委員会 2009 『長野遺跡群 元善町遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第123集
長野市教育委員会 2014 『長野遺跡群 善光寺門前町跡（3）』長野市の埋蔵文化財第135集
長野市教育委員会 2016 『長野遺跡群 県町遺跡』長野市の埋蔵文化財第147集
長野市教育委員会 2017 『長野遺跡群 県町遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第151集
長野市教育委員会 2020 『長野市埋蔵文化財センター 所報』No31



- | | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色粘性土層(10YR3/3 褐色土ブロック混しり) | 9 にふい黄褐色砂質土層(10YR4/3) |
| 2 褐色粘性土層(10YR4/4) | 10 褐灰色粘性土層(10YR4/1 鉄分沈殿) |
| 3 暗褐色粘性土層(10YR3/3) | 11 暗褐色粘性土層(10YR3/3 灰色粘土ブロック混しり) |
| 4 褐色土層(10YR4/4 鉄分沈殿) | 12 黒褐色粘性土層(10YR3/2) |
| 5 褐色粘性土層(10YR4/4 白色砂粒含む) | 12' 黒褐色粘性土層(10YR3/2 径3~15cmの円礫含む) |
| 6 暗褐色粘性土層(10YR3/4 径1cm程度の小礫含む) | 13 暗褐色粘性土層(10YR3/4) |
| 7 にふい黄褐色粘性土層(10YR4/3 褐灰色粘土ブロック混しり) | 14 褐色粘性土層(10YR4/4 灰色粘土ブロック混しり) |
| 8 暗褐色粘性土層(10YR3/4 径1cm程度の小礫含む) | 15 褐色粘性土層(10YR4/4 径3~15cmの円礫含む) |

図13 個別遺構図4 (SD 5 1/60)

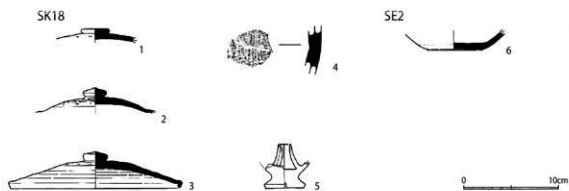


図14 遺物実測図 (SK18・SE2 1/4)

遺物写真図版

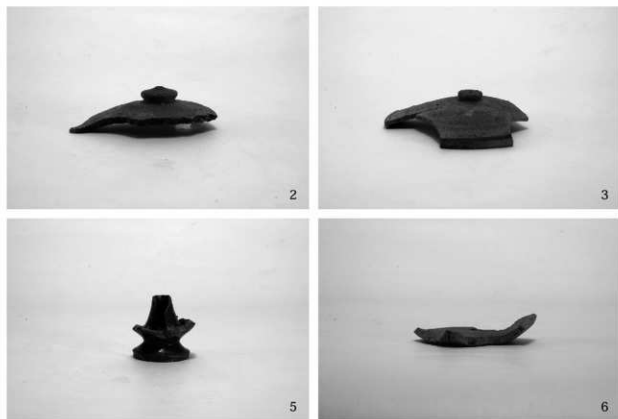


表3 遺物観察表

寸法の()内数値は残存値を示す。

国	番号	出土遺構		種別	器種	残存		寸法 (c m)			成形・調整・施文		備考・その他	
		遺構名	位置			部位	残存率	口径	底径	器高	外面	内面		
14	1	SK18	覆土	須恵器	杯蓋	ツمامミ〜天井部	1/1	-	-	(1.5)	回転ケズリ	ロクロナデ		
	2	SK18	覆土	須恵器	杯蓋	ツمامミ〜天井部	1/6	-	-	(2.7)	ロクロナデ 回転ケズリ	ロクロナデ		
	3	SK18	覆土	須恵器	杯蓋	全	1/2	17.8	2.65	3.9	ロクロナデ 回転ケズリ	ロクロナデ		
	4	SK18	覆土	須恵器	播鉢	胴部	-	-	-	-	ケズリ	卸目	拓本	
	5	SK18	覆土	陶器	乗瓿	円筒〜底部	1/1	-	-	4.05	4.7	施軸(底部除く)	施軸	
	6	SE2	覆土	須恵器	杯	胴〜底部	1/4	-	-	5.4	(1.7)	ロクロナデ 底部回転糸切	ロクロナデ	

第4章 総括

県町遺跡では、弥生時代中期後半から後期と、古墳時代中期後半から平安時代にかけての集落が確認されている。当該地では市街化が進んでいることもあり、遺跡の全容を把握することは困難だが、既往発掘調査成果から、集落は本調査地が立地する段丘面上に展開することが予想されている。

本調査地は、県町遺跡マンション建設地点と後町小学校跡地地点に近接する面積638㎡の範囲である。この2地点では、弥生時代中期後半と奈良時代から平安時代の集落跡が良好な状態で検出された。また、本調査地点から約180m離れた国際会館地点では古墳時代中期後半から後期と奈良時代から平安時代の集落が検出された。いずれの地点も複数の竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡が見つまっているが、本調査地点では溝跡・土坑が遺構の主体を成し、他地点とは様相を異にしている。また、本調査地点では県町遺跡に想定されている官衙あるいはその周辺集落を示す資料は検出されなかった。

本調査地では、弥生時代中期後半から集落の痕跡が認められる。調査区南端で検出したSD5は同時期の溝跡で、遺構規模や覆土の様相から後町小学校跡地地点において検出されたDSD4と同一遺構と判断した。後町小学校跡地地点では、弥生時代中期最終末の集落が検出されており、DSD4は同集落を囲郭する大溝の可能性が指摘されている。このことから、本調査地の大部分が同集落内部に位置していると考えられるが、SD5以外の検出遺構は溝跡2条、土坑1基、小穴4基のみである。遺物の出土量は少なく、居住遺構もみられない。大規模な擾乱があるため、この範囲に遺構が存在した可能性は否定できないが、同集落においては遺構のまばらな地帯であることが看取される。なお、続く弥生時代後期から古墳時代にかけては、本調査地では遺構・遺物ともに検出されていない。

次に人為的な痕跡が認められるのは平安時代に入ってからである。遺構は調査区南半に分布する。竪穴住居跡はみられず、検出した土坑、小穴にも掘立柱建物跡あるいはそれを予想する配列は認められない。出土遺物が少なく、多くの遺構は時期の特定に至らなかったが、時期が判断できる遺構は概ね平安時代前期（9世紀前葉）頃と推定する。県町遺跡の既往調査で確認された奈良～平安時代集落の時間的な範囲に収まり、集落範囲が本調査地までおよんでいるものと判断する。しかし、調査区中央以北は同時期の遺構が検出されず、弥生時代中期と同様に遺構の空白地帯となっている。近接するマンション建設地点および後町小学校跡地地点では8世紀前半から9世紀前半の集落が検出されていることを鑑みると、本調査地点の遺構空白地帯が集落居住域の境界であった可能性が考えられる。

本調査成果から、調査地では両時期を通して人為的痕跡が希薄であり、集落縁辺部の様相であることが窺える。また、調査区の各トレンチで確認された土層堆積の状況から遺構空白地帯の一部に流路あるいは湿地の存在が想定でき、該期において地形的要因から居住に至らなかった可能性も考えられる。

県町遺跡に関しては、今後範囲が拡大することが予想される。集落範囲の想定とともに、居住域から縁辺部の土地利用についての検討も課題となる。

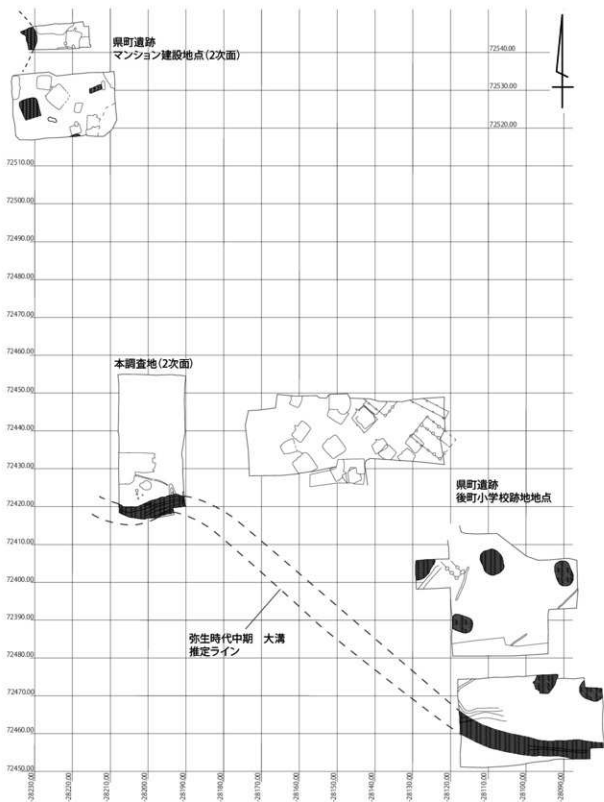


図15 泉町遺跡 弥生時代中期大溝推定範囲 (1/1,000)

(図15は長野市の埋蔵文化財第147集、第150集をもとに筆者が作成した。)
 (なお、図中のグレー塗りつぶし部分は弥生時代中期の遺構を示す。)



調査区北半 全景 (第1次面 北西から)



調査区南半 全景 (第1次面 南西から)



調査区西壁土層堆積状況（東から）



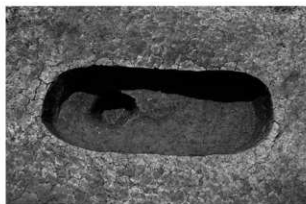
調査区西壁土層堆積状況（東から）



調査区西壁土層堆積状況（南東から）



SD1・SD2完掘（南西から）



SK3 完掘（東から）



SK16（東から）



SE1 礫出土状況（東から）



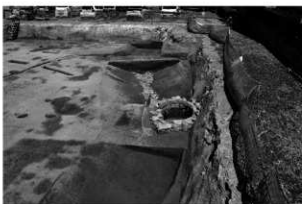
SE2（北から）



調査区南半 全景 (第2次面 南西から)



調査区南半 全景 (第2次面・北東から)



SD5 (西から)



SD5 (北東から)



SD5セクション (南西から)

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん あがたまちいせき 3
書名	長野遺跡群 県町遺跡(3)
副書名	北野建設株式会社長野本社ビル解体工事及び(仮)北野建設株式会社新長野本社ビル建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第157集
編著者名	飯島哲也 篠井ちひろ
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2021(令和3)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながのいせき 県町遺跡	ながのけん ながのし 長野県長野市 おほあざ みなかたから あざ 大字南長野字 しやうとく 聖徳601番1外	20201	C-005	36° 39' 08"	138° 11' 04"	20190408～ 20190531	638㎡	ビル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
県町遺跡	集落跡	弥生時代中期 平安時代 近現代 時期不明	溝跡 2条 溝跡 1条 土坑 8基 井戸跡 2基 溝跡 3条 土坑 11基 小穴 17基			弥生土器 土師器 須恵器 陶器		弥生時代 中期大溝
概要								
<p>平安時代から近現代遺構面(第1次面)と弥生時代中期遺構面(第2次面)の2面で調査を実施した。第1次面では土坑および小穴が遺構の主体を成し、分布は調査区南側に集中する。第2次面では、調査区南端に断面V字形の大溝を検出した。遺構の規模、形態や覆土の堆積状況から、県町遺跡の既往調査で確認されていた弥生時代中期の集落を囲郭する大溝の一部と判断される。</p>								

長野市の埋蔵文化財第157集

長野遺跡群

県町遺跡(3)

令和3年3月31日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 長野市埋蔵文化財センター

印刷 有限会社 アツツーロ